見えし所も亦同じく、並に讀てコケといふ、萬葉集に蘿讀む事亦同じ、倭名抄にも松蘿讀てマツノコケといふ事前に註す、

今も俗に蛇また魚の鱗をコケといふ也、此語その苔の如くなるによりて云ひしにや、また苔をコケといふ事は、鱗に似たるに因りてかく云ひしにや其詳なる事は知るべからず、

〔倭訓栞前編九古〕こけ　古事記に蘿をよみ、倭名抄に苔をよめり、木毛の義なるべし、或は莓をよめり、韻會に苔也と見ゆ、苔は水衣也と注せり、されど地衣草もいへり、又石衣をちいさきこけとよめり、石髮も同じ、東坡が詩に空餘石髮挂魚衣といへれば、水衣も通じいふべし、又松蘿をまつのこけ、屋遊をやのへのこけとよめり、こけ衣、こけ席など皆みたてたる詞也、苔の袖苔の袂など、桑門によめり、苔の戸、苔の庵などは、閑居の體をいふ也、

〔和漢三才圖會九十七苔〕地衣（こけ）　仰天皮　掬天皮

本綱、地衣、乃陰濕地被日晒起苔蘚如草狀者也、

氣味苦冷微毒　取停水濕處乾卷皮爲末傅於陰上粟瘡治之神効、

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕地衣草　ヒカリグサ古歌　ヂゴケ　アヲゴケ　ビロウドゴケ　一名青膚事物紺珠

陰地上ニ一面ニ生ズル綠苔ナリ、形鵞毛絨ノ如シ、數品アリ、土部仰天皮ハ、附方ノ停水濕處ノ乾卷皮ト云フト同ジ、水ノツキタルアト日照ルトキハ、ソノ土皮トナリ、起テ乾キ反卷スル者ナリ、此ヲ聖濟總錄ニ日炙沙ト云ヒ、外臺秘要ニ乾卷地皮ト云フ、地衣草トハ別ナリ、

石蕊

〔重修本草綱目啓蒙十六苔〕石蕊　ハナゴケ　シラゴケ　一名石蕊花本草彙言　石雲茶同上　蒙茶廣東新語

山中土石上ニ生ズ、高サ二三寸叢生シ、白色形花蕊ノ如シ、圓細ニシテ枝叉ヲ分ツ、內空シ、採リ研テ茶トナシ飲ベシ、